

学生と教職員が共に創る「生きるための大学」

－FD・SDセミナー参加記－

学生サポートセンター教授

渡部 みさ

2010年5月27日・28日に開催されたFD・SDセミナーに参加し、「大学」に関わる複数の講演を聴くとともに、教職員が集う懇親の機会を得ることができました。授業担当の関係で第1日目のみの参加でしたが、充実したその時間を拙稿にて少しでもお伝えできればと思います。

臨床心理学を専門とする私は、4月から人文科学研究科大学院の授業や学部都市教養プログラムの授業を担当、一方で学生サポートセンターにおいて学生相談を行っています。本研修会の内容は、これらの仕事に密接に関わるものでした。

第1日は、FD委員の梶井先生の司会により、上野副学長の開会挨拶、原島学長の高話へと続きました。本学の理念、大学改革の現況と将来像を語られ、「教育システムを通して次世代へ希望を伝える」お話に心打られました。

次に筑波大学の吉武博通先生に「教育研究と経営の質の持続的向上に向けて」と題した講演を頂きました。民間企業で長く活躍された先生は、「現場重視」と「論理的思考」とを大学改革においても大切にされた方です。大学の使命や歴史の尊重を強調されており、評価委員である本学をはじめとする「縁ある大学」への温かい思いを語るご様子が印象的でした。また「首都大学東京の存続意義」に触れられて、「学生が居て卒業生がいる以上、存続意義がある」と明言されたことであらためて「大学と学生へ向けた愛」の大切さを感じました。

続いて、教務委員長長の山下先生が「基礎・教養教育における検討課題」について講演され、現在の基礎・教養教育の構成と検討課題を説明下さいました。ご自身の授業における学生の自由記述とそれに対する返答例はインタラクティブな授業構築の参考になりました。

この日の最後には東京大学の牧野篤先生が「生きるための大学」と題して講演されました。リストカッターをはじめとする「生きづらい若者たち」の現状を提示され、解離を促進する今日の社会状況に言及されました。今日の若者にとっての「自我」が、かつての若者とは異なって受動的であり断片的であること、こ

れは社会現象として首肯されるものです。講演の最後には、都会と農村との交流により若者が「つながり」の回復を目指す試みを紹介されました。

今日の若者が身体性や人とのつながりを切望しリストカット等に頼らざるを得ない状況を、自己肯定的文脈へ転換していくことは火急の課題です。その試みの一つとしての「有機農法とその作物流通への若者のコミット促進」に関して牧野先生はお話されましたが、同様の効果を持つ別の試みを、大学内で教職員と学生との関わりの中で生み出していけるならば、大学全体が活性化していくことでしょう。

学生支援の礎をどこに置くかは各教職員の専門性と持ち味によって異なります。牧野先生は教育学・社会的な発想の中で上述の取り組みをなされてきたわけですが、臨床心理学的な発想の中では、人と人との関わりそのものの中に展開を期待する面があります。私に関わっている相談面接とは、心の中の土を作り耕し、生きていく力を育てる作業です。また個別面接に限定しない広い意味での学生との様々な関わりの中で、各教職員は学生の身体性や人とのつながりの実感を高め、生きていく力を育てていけるのではないのでしょうか。各部署の教職員が協同し、学生の成長を支えること、その結果私たち教職員もまた育てられていくこと、これこそ「生きるための大学」の醍醐味であると感じます。

最後となりましたが、研修会開催にご尽力いただいたFD委員会の先生方と担当職員の皆さまに心より御礼申し上げます。